いざ、出世の街 浜松へ

――春。

浜松城の周りを桜の花びらが優美に舞い、浜松城公園は花見客で賑わう。時折吹き抜ける春疾風(はるはやて)に観光客は驚くが、風が強いことで知られるこの土地ならではの春の余興と知れば、それも旅の風情ある愉しみの一つとなる。

浜松は四季折々の情緒を味わうことの出来る、優れた土地でもある。南には遠州灘があり、北には天竜の山々が尾根を連ねる。それぞれの美兆もさることながら、海の幸、山の幸が、一年を通して手に入る。

浜松旅行の楽しみとして真っ先に浮かぶのは、もっぱら鰻や餃子、浜名湖、舘山寺温泉などだが、今年はそれだけではないらしい。

運気上昇の旅へ出かけよう!

浜松で運気上昇というと、少し意外に思われる方もいるかもしれないが、数百年前から現代にいたるまで、浜松で英気を養い大出世を果たした人物は数多くいる。

藩政260年の間に25代の城主が誕生した浜松城城主の中には、在城中に幕府の要職に就いた者も多く、幾人もの老中を輩出した。近代においても世界的研究者や技術者、音楽家や芸術家を輩出している。さらには、世界的企業も、数多く浜松から生まれている。『出世の街』と呼ばれるゆえんである。

その中から代表格を一人挙げるとしたら、なんといっても徳川家康公であろう。家康公は元亀元年(1570年)から天正14年(1586年)までの17年間を浜松で過ごした。その間、三方ヶ原の戦いや長篠の戦いなど数多くの戦にのぞみ、この地を天下統一への足掛かりとしている。また、二代将軍となる秀忠公が生まれたのも浜松であり、子授かりにご利益があるとされる名所も存在している。

2015年のビッグイベント『家康公四〇〇年祭』

2015年は徳川家康公没後400年にあたり、家康公にゆかりのある浜松、静岡、岡崎の3市3商工会議所と静岡県では、『徳川家康公顕彰四百年記念事業』と冠して、さまざまな記念イベントを催している。浜松では一年を通して、『観光』『文化』『グルメ』と、官民一体となったイベントを数多く展開する予定だ。

浜松観光をするなら、まず始めに浜松城へ行くことをオススメする。「出世街道」と名づけられた浜松城への道のりを、一歩一歩踏みしめながら進むのも楽しみの一つだ。戦国時代のさなか、家康公が城から望んだ景色を想い、歴史のロマンを感じてみるのもいいだろう。浜松に点在する家康公ゆかりの地をひとしきり巡拝すれば、あるいはその恩寵(おんちょう)を賜ることができるかもしれない。

それでは前置きはこの辺にして、早速、2015年の浜松を徹底的に楽しむ旅に、出掛けるとしよう。

浜松時代の

家康公から学ぶ 出世・開運術

浜松で過ごした17年の間に、天下統一の礎を築いた家康公。そこには家康公ならではの哲学が隠されている。天下人から出世・開運の秘訣を学ぼう!

我が宝は、我の為に命を投げ出す部下(家臣)なり

古今東西の絢爛な逸品を諸大名の前で自慢する豊臣秀吉公に「お前の宝は何だ」と聞かれ、家康公が言ったとされる言葉。秀吉公は思わず黙ってしまったという。良きリーダーは良き部下を持つものである。事実その言葉通り、三方ヶ原の戦いでは、本多忠真が殿(しんがり)として、夏目吉信が家康公の身代わりとして討ち死にしている。家康公の大出世は、家臣たちから厚い信頼があってこそ成し遂げられたものである。

夏目次郎左衛門吉信の碑

本多肥後守忠真の碑

犀ヶ崖古戦場には、「夏目次郎左衛門吉信」と「本多肥後守忠真」の碑が残っている。
浜松市中区鹿谷町25-10

人は負けることを知りて、人より勝れり

浜松城在城時代、三方ヶ原の戦いで武田信玄に人生最大ともいえる大敗を喫した家康公。命からがら浜松城に逃げ帰った家康公は、敗戦を肝に銘じるため自分の情けない姿を絵師に描かせ、その肖像画「しかみ像」を生涯手放さなかったという。それ以降、家康公は負け戦をすることなく、やがて天下統一を果たした。負けを知っている者だけが勝利を掴むことができる、という教訓である。

三方ヶ原の戦い

願いを叶える秘訣は『健康』にあり

浜納豆
味噌のような濃厚な大豆風味が特徴の、糸を引かない納豆。栄養価が高く保存性も良かったため、兵糧として用いられていた。

家康公には三つの願いがあったという。一つは天下統一。二つ目は子どもがたくさん欲しい。その二つが叶えられたのも、三つめの願いである「長生き」のおかげであろう。健康に気を配ることで知られる家康公は、浜松の特産物『浜納豆』を好んで食べたと言われ、当時としてはかなり高齢の75歳まで生きた。普段の食事は質素で、麦飯を好み、海の幸・山の幸をバランスよく取り入れ、旬の食材も大切にした。徹底した食事管理により健康を維持できた家康公だからこそ、天下人となり、長い徳川時代の基礎を築くことができたのであろう。

安定した人生を望むなら、子をたくさん産むべし

家康公には正室が2人、側室が15～19人ほどいたと伝えられ、多くの子どもをもうけたという。その甲斐あってか、家康公が築いた太平の世は実に260年も続いた。後の二代将軍秀忠公が浜松で生まれた折には、『五社神社』を産土神(うぶすながみ)とし、篤く崇敬した。現在では子守り、子育ての神としての信仰が盛んである。

五社神社・諏訪神社

音楽分野の出世人

世界へ羽ばたくピアニスト達

楽器産業、音楽文化が盛んな浜松市。2014年12月には、ユネスコ創造都市ネットワーク(音楽分野)への加盟が決定し、世界中からますます注目を浴びている。なかでも3年に一度開催されている「浜松国際ピアノコンクール」は、有望なピアニストが集結することで、評価の高いコンクールである。出場・入賞をきっかけに出世のチャンスを掴み、世界へと羽ばたいたピアニストは数多く、過去の優勝者には、海外の一流ピアニストたちが名を連ねている。

第9回浜松ピアノ国際コンクール
2015年11月21日(土)～12月8日(火)
問／浜松国際ピアノコンクール事務局[(公財)浜松市文化振興財団内]
TEL:053-451-1148　http://www.hipic.jp/

上原彩子
(日本)

2000年「第4回浜松国際ピアノコンクール」にて第2位及び日本人作品最優秀演奏賞を受賞。その後、2002年にモスクワで行われた「第12回チャイコフスキー国際コンクール」において、女性として史上初めてピアノ部門第1位を受賞。以後、世界各地でリサイタルや著名なオーケストラとの共演を重ねている。

アレクサンダー・ガブリリュク
(ウクライナ)

2000年「第4回浜松国際ピアノコンクール」にてわずか16歳で第1位を獲得、審査委員長から『20世紀後半最高の16歳』と評された。2002年に交通事故で頭部に重傷を負い生死の境をさまようも、奇跡的な復活を遂げ、2005年「第11回ルービンシュタイン国際ピアノコンクール」で第1位、金賞、ベストコンチェルト賞を受賞。

ラファウ・ブレハッチ
(ポーランド)

2003年「第5回浜松国際ピアノコンクール」にて最高位を獲得。自身初めての国際コンクールへの参加であり、当時ブレハッチの自宅のピアノはアップライトであったため、これを知ったワルシャワ市が日本出発前の2ヶ月間、彼にグランドピアノを貸与したという逸話が残っている。2005年には「第15回ショパン国際ピアノコンクール」で優勝。